

様態動詞と結果動詞*

奥野浩子

本稿の目的は、Levin and Rappaport Hovav (以下、L&RHとする) (1991) や Rappaport Hovav and Levin (以下、RH&Lとする) (1998) など論じられてきた、動詞を様態動詞 (manner verb) と結果動詞 (result verb) に分類することの妥当性と、その分類基準を検討することである。

様態動詞と結果動詞

L&RH (1991) では、動詞の可能な意味についての興味深い一般化が以下のように述べられている。

1. There do not seem to be verbs in English that lexicalize both manner/ means and result/ direction components. (L&RH 1991: 147)

英語の動詞には、「様態／手段」と「結果／方向」の両方を語彙化しているものはないようである。

彼女たちは、この一般化の説明の中で、様態と結果の「相補分布」(complementary distribution) という表現を用いている。この相補分布の仮説をめぐっては、近年、多くの研究がなされているが、彼女たちの研究には、顕在的であれ潜在的であれ、この仮説が一貫して読み取れる。

RH&L (1998) は、*break* や *open* のような状態変化動詞と *come* や *go* や *arrive* のような有方向移動動詞は、*sweep* のような表面接触動詞や *run* のような移動様態動詞や *whistle* のような音放出動詞より、項表現の幅が狭いことを例をあげて示し、状態変化動詞と有方向移動動詞を「結果動詞」、表面接触動詞や移動様態動詞と音放出動詞を「様態動詞」として、結果動詞は様態動詞より分布が制限されていると論じている。その根拠として次の3点があげられている。

まず、2項動詞の場合、様態動詞では直接目的語の省略が可能であるが、結果動詞では省略ができない。

2a. Leslie swept.

b. *Kelly broke.

次に、非下位範疇化目的語との共起は、様態動詞では可能であるが、結果動詞では不可能である。

- 3a. Cinderella scrubbed her fingers to the bone.
- b. *The clumsy child broke his knuckles to the bone.
- 4a. The child rubbed the tiredness out of his eyes.
- b. *The clumsy child broke the beauty out of the vase.

そして、用法の拡大の差があげられている。様態動詞である表面接触動詞では、(5a) のように位置変化用法、(6a) のように状態変化用法、そして、(7a) のように創造用法が可能であるが、結果動詞である状態変化動詞には拡大用法はない。

- 5a. Kelly swept the leaves off the sidewalk.
- b. *Kelly broke the dishes off the table.
(meaning: Kelly removed the dishes from the table by breaking the table)
- 6a. Kelly shoved the dishes off the table.
- b. *Kelly broke the dishes off the table.
(meaning: Kelly broke the dishes and as a result they went off the table)
- 7a. Kelly swept the leaves into a pile.
- b. *Kelly broke the dishes into a pile.
(Kelly broke the dishes and made a pile out of them)

このような拡大用法は、Levin and Rapoport (1988) で提案された、語彙従属 (lexical subordination) というプロセスによって説明することができる。語彙従属は、語彙概念構造 (LCS) のレベルで適用されるもので、もとのLCSに manner を含む動詞に適用され、位置変化や状態変化や創造を表わすLCSを作り出すものである。例えば、*sweep* の基本用法でのLCSは (8a) のように表わされ、語彙従属が適用された (5a) のような位置変化用法のLCSは (8b) のように表わすことができる。

- 8a. [x ACT<*SWEEP*> ON y]
- b. [BECOME [y BE <*PLACE*.>]] BY [x ACT<*SWEEP*> ON y]

語根 *sweep* は、活動を表わす意味述語 ACT の様態 (manner) を表わすものと表記される。LCS に manner を含む動詞とは様態動詞を指すのであるから、様態動詞だけが拡大された意味を持つということになる。

結果動詞は非下位範疇化目的語と共起できないとしたが、結果動詞が非下位範疇化目的語と共起

する例が、RH&L (1998: fn18) で (9a) の 1 例だけあげられている。しかし、類例は他にも見つかる。

- 9a. Kelly broke the branch off the tree. (RH&L 1998: 123)
- b. Sam sawed a piece off the block. (Goldberg 1995: 154)
- c. Sam tore a piece off the block. (*Ibid.*)
- d. She broke a grape off the bunch. (Goldberg 2001 154)

(9a) に関して、Rappaport Hovav たちは、本来の目的語が前置詞句内に表わされていて、この本来の目的語が「全体」を表わし、非下位範疇化目的語は「部分」の関係にあると指摘している。本来の目的語が表わす「全体」に対して何らかの働きかけをした結果を、非下位範疇化目的語である「部分」が表わしていると考えられる。(9b)、(9c)、(9d) でも、本来の目的語は前置詞句に現れ、非下位範疇化目的語はそれと「全体・部分」の関係になっている。このような例から、非下位範疇化目的語を含む文でも、同一文内に本来の目的語が格下げされた形で現れていれば容認されることが考えられる。

奥野 (2017) では、非下位範疇化目的語の生起条件として、「全体・部分」関係のほかに、本来の目的語との「接触」関係もあげて、次のような例を説明した。

- 10a. He cut himself loose. (Goldberg 1991: 93)
- b. He tore himself free. (*Ibid.*)
- c. Firemen and a passer-by dragged him to the bank after cutting his trapped legs free from the canoe. (BNC: CBF)
- d. It took firemen nearly two hours to cut eight passengers free. (BNC: CEN)

Goldberg (1991) によれば、このような例では、本来の目的語は表出されていないが、非下位範疇化目的語になっているものを「拘束しているもの」である。この本来の目的語と非下位範疇化目的語で表わされているものは「接触」していることになる。

したがって、結果動詞と非下位範疇化目的語との共起は、本来の目的語との一定の関係があれば可能であるといえる。本来の目的語は、同一文中に現れている場合もあるし、何らかの推論により突き止められる場合もある。

結果動詞と目的語

結果動詞は様態動詞より分布が制限されているという主張に対して、Goldberg (2001) は、使役動詞 (causative verb) の分布は、語彙情報や談話要因や構文要因などを考慮してこそ予測できると結論づけている。彼女のいう使役動詞とは、被動者 (patient) に状態変化が起こったことを含意

すると規定されているので、Levinたちの結果動詞に相当する。そしてGoldbergは、使役動詞に対するものとして、活動動詞 (activity verb) という語を用いているが、Levinたちは、様態は活動動詞について修飾するものと捉えているので、Goldbergの活動動詞はLevinたちの様態動詞と同じものを指すと考えて差し支えない。このため、以下では、結果動詞・様態動詞という用語を用いることにする。

結果動詞の目的語の省略可能性に関して、Goldberg (2001) は、目的語が不定の場合や非特定のな場合に省略できるとして、次のような例をあげている。

- 11a. The chief-in-training chopped and diced all afternoon.
- b. Pat gave and gave, but Chris just took and took.
- c. Tigers only kill at night.
- d. The singer always aimed to dazzle/ please/ disappoint/ impress /charm.
- e. These revolutionary new brooms sweep cleaner than ever.
- f. The sewing instructor always cut in straight lines.

(11a) と (11b) では「繰り返し」が、他は「総称性」が表わされていることがわかる。さらに、目的語が不定であったり非特定のであっても、繰り返しや総称性がなければ、目的語の省略は許されないことを示すため、次のような過去時制を含む例があげられている。

- 12a. The tiger killed *(some animal).
- b. I heard Pat cut *(something)

結果動詞と非下位範疇化目的語との共起については、Goldberg (2001) でも、共起不可能として、次のような結果構文の例をあげている。

- 13a. *Chris murdered Pat crazy. (to mean Chris murdered other people and it drove Pat crazy.)
- b. *Sam bludgeoned himself silly. (to mean Sam bludgeoned others until he became silly.)
- c. *She smashed herself into a jail cell. (to mean She smashed things which resulted in her being incarcerated.)

ただし、非下位範疇化目的語として *one's way* は可能であるとして、次のような例をあげている (Oxford University Press corpus から)。

- 14a. The rebels raped, pillaged and murdered their way through villages of the Krahn tribe.
 b. “A warrior in 16th century Japan, bludgeoning his way to power beneath a cherry tree ...”
 c. “... fans smashed their way into the Utrecht stadium ...”

それでも、省略された本来の目的語は非特定のな解釈を受けるということである。同じく非下位範疇化目的語を伴う (13) と (14) の違いは、*one's way* 構文により、動詞が表わす行為の「繰り返し」が表わされるためだという。(14) では行為の「繰り返し」が表わされるのに対して、(13) では「繰り返し」が表わされないため非文法的であると述べられている。しかし、(13) の動詞も *one's way* 構文にすると、容認されるようになるとして、次のような例をあげている。

- 15a. The convict murdered his way out of the country.
 b. A warrior in 16th century Japan bludgeoned his way to the crown.
 c. The unruly fan smashed his way out of the Utrecht stadium.

(13) の場合と異なり、*one's way* 構文で使用すると、本来の目的語は無指定の「人」や「もの」と解釈され、「繰り返し」が表わされることになり、文法的になっている。

影山・由本 (1997) でも、結果動詞である *murder* がこの構文に現れている COBUILD からの例をあげて、*murder* という動詞は状態変化であるが、リチャード 3 世は王位に就くために邪悪な人物を次々と殺害していったから、この *murder* は繰り返しの活動として認識されていると述べている。

16. He is the same age, 31, as Richard was when he murdered his way to the throne in 1483.
 (COBUILD Word Bank)

結果動詞は、非下位範疇化目的語として *one's way* をとることができることがわかったが、完了性の判別に用いられる時間表現である *in*~や *for*~ との共起関係は、Goldberg は以下のように示している。

- 17a. The convict murdered his way out of the country (in a few days/ ??for a few days).
 b. A warrior in 16th century Japan bludgeoned his way to the crown (in a year/ ??for a year).
 c. The unruly fan smashed his way out of the Utrecht stadium (in an hour/ ??for an hour)

このことから、Goldberg は本来の目的語の省略を認可しているのは、非完了性 (atelicity) ではなく、「繰り返し」であると論じている。結果動詞を含む *one's way* 構文は、構文としては「繰り返し」の行為を表し、アスペクトとしては完了を表すということになる。繰り返しとは「継続」を表し、

完了の概念とは矛盾するように思われるが、影山・由本 (1997: 186) によると、『この構文 (*one's way* 構文: 筆者) が一見、到達を意味するように思えるのは、前置詞が着点を指すからではなく、ある程度の距離をもつ「経路」が要求されるからである』。つまり、その経路に沿って移動している間は、動詞が表す行為が継続されると考えることができる。

結果動詞と非下位範疇化目的語

RH&L (2010: 21) は、結果動詞と様態動詞との違いを“while manner verbs are found with unspecified and non-subcategorized objects in non-modal, non-habitual sentences, result verbs are not”と、非下位範疇化目的語との共起可能性であると述べ、L&RH (2013: 57) では、非下位範疇化目的語と共起することが様態動詞の“hallmark”であると述べている。非下位範疇化目的語との共起が、様態動詞と結果動詞を区別する決定的要因と考えているが、上でもあげたように、結果動詞が非下位範疇化目的語をとる例は存在する。このことに関して、L&RH (2013) は、「様態・結果の相補性」(manner / result complementarity) に対して反例と思われるような、一つの動詞が様態動詞としての性質も結果動詞としての性質も示す動詞として、*cut* と *climb* を例にあげて、様態動詞としてふるまう場合には結果動詞としての性質はなく、結果動詞としてふるまう場合には様態動詞としての性質はなくなっているとして、様態と結果の相補性は保たれると主張している。様態と結果という相反する用法をもっているけれども、同時に様態と結果を意味することはないという主張である。ここで、結果動詞 *cut* についての議論を概観してみると、基本的用法においては、*cut* は結果を語彙化しているため、①ゼロ派生名詞 *cut* は結果 (切り傷、切片) を表わし、②反使役用法がある。結果とその結果をもたらす様態に緊密な関連があれば、結果の意味をなくして様態を語彙化でき、*cut* は「動きと接触」(motion and contact) の動詞になり、動能 (conative) 構文が可能になる。彼女たちがあげた *cut* の自動詞用法の例 (18) と、動能構文の例 (19) は以下の通りである。

18a. ... the rope cut on the rock releasing Rod on down the mountain. (L&RH 2013: 55)

b. Suddenly, the rope cut and he fell down the well. (*Ibid.*)

19a. Finally, she got the blade out and started cutting at the tape on Alex ... (L&RH 2013: 54)

b. It had been a stupid act on her part, I thought to myself as I cut at the rope with my knife, aware that Sarnian Lady was sinking further ... (*Ibid.*)

確かに、*cut* の場合には刃物のような道具の使用が想定されるため、様態動詞としての用法があることは理解が容易である。しかし、真っ先に結果動詞としてあげられる *break* については、様態が想定しにくく、様態用法があるとは考えにくい。ところが、*break* が非下位範疇化目的語と共起する例は、先にあげた (10a) や (10d) の他にもある。

まず、コーパスBNCで *break* が *one's way* 構文に生じている例 1 を検索したら、以下の 5 例が見

つかった。

- 20a. America's besetting sin is its preference for acting alone, writing its own trade laws and using them to break its way into other people's markets.
- b. So generous is this bequest by birds to their young that a chick needs no additional food from which to build the flesh and bones and feathers of its infant body, and it still has enough energy left over to break its way out of the shell.
- c. Demons broke their way into the locked church, where priests were incanting psalms round her body and the Devil called her up from her coffin and bore her away.
- d. I've worked hard for my money all my life and I don't see why anyone should be able to break their way into someone's home and just take what they want.
- e. Mr. Hutchinson was knocked to the ground as they broke their way in.

(20b) では、ひな鳥が殻を「蹴って」破るという様態が想定できるが、ほかの例では、様態や手段を想定することは難しいと思われる。この点は、*cut*とは違っている。*cut*が*one's way*構文に生じている例を同じくBNCからいくつかあげてみる。

- 21a. As we cut our way through shrubs and trees to get there we were hysterical.
- b. The men crossed the low hills..., then proceed to cut their way through the jungles in the valley...
- c. Rescues had to cut their way through the chassis of the mangled coach to reach the dead and injured.
- d. A peaked cap was cutting its way through the crowd toward me...
- e. ... when Grandmaster Flash began cutting his way into musical history.

(21a)、(21b)、(21c) では、刃物状のものの使用が想起できるし、(21d) と (21e) では、刃物による切断のように勢いよく直線的に移動することが想定できる。

また、Levin & Rapoport (1988) で '*a hole*' 構文といわれている作成を表わす構文に、*break* も *cut* も生じるが、様態が想定し易いかどうかの違いがあるように思われる。

- 19a. Terry cut a hole in the ice. (L&RH 2013: 57)
- b. Workmen cut a hole in the pipe. (OALD)
- c. She cut a hole through the wall. (ジーニアス英和辞典)
- 20a. Then after 24 days, the young break holes in the skin and swim swiftly away to seek safe

hiding places.

b. ... you will have to break a hole in the wall of the chamber ...

c. Break a hole into the existing inspection chamber and chop away the benching.

(20はすべてBNC)

一定の道具の使用が考えられる *cut* と、様態も手段も考えにくい *break* の違いがここでも見られる。

L&RH (2013) は *cut* に様態動詞の用法があることを動能構文で示したが、Levin (1993) では *break* はこの構文をとれないとしている。同じく結果動詞と分類される *cut* と *break* には、ともに非下位範疇化目的語と共起できるという様態動詞の特徴があるが、*cut* には動能構文をとれるという、もう一つの様態動詞の特徴があり、特定の道具の使用が関わっているのに対して、*break* は、動能構文に報じることができず、特定の道具や様態の想起もできない。

したがって、非下位範疇化目的語との共起可能性を、様態動詞と結果動詞を分ける決定的な基準とすることは再考を要すると言わざるをえない。

結び

これまでの考察から言えることは、結果動詞は一様ではないということである。様態動詞と結果動詞には明らかな違いもあるのであるから、この二分法は保持したまま結果動詞を下位区分するか、あるいは、*cut* や *climb* のような二つの用法があるものを含めて三分類にすべきかは今後の課題になる。

* 本稿の執筆にあたり、インフォーマントとして貴重なデータを提供してくれた Vic Carpenter に心からの謝意を表します。

注

- 1 この *break* を含む *one's way* 構文を手直しして、時間表現との共起可能性をインフォーマントにチェックしてもらった。
 1. Amerika wrote its own trade laws and used them to break its way into other people's markets {for a year/ in a year}.
 2. A chick needs no additional food from which to build the flesh and bones of its infant body and it still has enough energy left over to break its way out of the shell {for a day/ in a day}.
 3. Demons broke their way into the locked church {for an hour/ in an hour}.
 4. He was knocked to the ground as they broke their way in {for five minutes/ in five minutes}

インフォーマントの判断は、*in* ~ は全て可能であった。興味深いのは、1と2の *for* ~ についてのコメントであったので、紹介したい。まず、1は *for* ~ の場合も可能であり、The U.S. would only break its way into the foreign

markets for one year, and then presumably leave these markets で、一年間は他国の市場に介入してその後撤退するという解釈であり、2については、... implies that the chick would return to its shell after one day と一日したら殻の中に戻るという(奇妙な)解釈になるということであった。つまり、for ~は到達点に留まる時間を表し、その後は元に戻るという解釈が示されたことになる。*one's way*構文と時間表現の共起関係については今後の課題にしたい。

参考文献

- Goldberg, Adele E. (1991) "A semantic account of resultatives," *LA* 21: 1-2, pp.66-96.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Constructional Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago University Press.
- Goldberg, Adele E. (2001) "Patient arguments of causative verbs can be omitted: the role of information structure in argument distribution," *Language Sciences* 23, pp.503-524.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structure*, MIT Press.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』、研究社.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*, University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Tova R. Rapoport (1988) "Lexical subordination," *LCS* 24, pp.275-289.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1991) "Wiping the slate clean: A lexical semantic exploration", *Cognition* 41, pp.123-151.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2013) "Lexicalized meaning and manner/result complementarity," Boban Arsenijevic, Berit Gehrke and Marin Rafael (eds.) *Studies in the Composition and Decomposition of Event Predicates*, Springer: Dordrecht, pp.49-70.
- 奥野浩子 (2017) 「非下位範疇化名詞句を伴う結果構文の成立条件」、仁科弘之教授退官記念論文集『言語をめぐるX章 ―言語を考える、言語を教える、言語で考える』 埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2、pp.210-222.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (1998) "Building verb meanings," Butt, Miriam and Wilhelm Geuder (eds.) *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, CSLI Publications, Stanford, CA, pp.97-133.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2010) "Reflections on Manner/Result complementarity," Malka Rappaport Hovav, Edit Doron and Ivy Sichel (eds.) *Syntax, Lexical Semantics, and Event Structure*, Oxford University Press, pp. 21-38.